ニュ（六日間）プラッシ指導のドウフィネー、アルプ（七日間）ショレー及びシャボー指導のジュラ及びサボアの前アルプ（十日間）等がある。特に三番目のものは、指導者が二人ともこの地方を主題としてテーズを書いたのだから必ず面白いと思ふ。

會議終了後にはドマンジョン指導のパリールーアンーアーヴル（五日間）ヴェネヴァン指導のプロヴァンス（七日間）があり、後者はそれ程の興味もなささうである。一寸變つて居るのはベルナール指導のアルジェリアの旅行（十三日間）で旅程によつては非常に面白い旅行となると思はれる。

この短い報告も氣早だが、以上の遠足に對する申し込みを今年一杯としたのも亦大したあはて方であると云はねばなるまい。

巴里地理學研究所にて（五、五、一六）

新著紹介

○「土木地質學」工事編

渡邊貫著　菊判二四〇頁、工業雜誌社發行　二圓五十錢

本書は先年發行された土木地質學の改訂三版であつて、次に出る理論編の姉妹篇である。改訂前のものは工事の現場に臨む人にとつて未だ不便の箇所が多かつたが此の度新に地下水と隧道工事、堰堤工事と地質、附錄として岩石の分類、地質調査は如何なる仕事かの各項を加へて愈々使用者の便を加へた。土木地質學なる應用方面の著書は實に渡邊學士の改訂前の本著をもつて我國に始めて現れたのであつたから多少不便はあつたにして土木事業者を益したことは甚大であつた。著者は其の後も常に本書の成長を計つて改訂版を茲に出すと共に更に理論篇を公にせんとするに至つたことは我々の寔に感謝する所である。語學をよくする著者が英獨佛の各國の著書の中から我國に必要なるものを選ぶに當つて丹那隧道地質調査以來の經驗を以つてしつゝあることは我々の最も信をおくことの出來る點で、本書中に滿載する圖版は迂遠なる理窟を避け我々にとつて最も大切なもののみであるから地形、地質の教材として用ゐても頗る有益である。印刷圖版とも頗る明瞭、活字は九ポイント十八行詰であるから近頃續出する五號活字の十四行前後の著書の二倍の量を包含してゐる。（本間）

○長野縣下水内郡地質誌

君塚康治郎著　菊判七四頁　長野縣下水内教育會發行　非賣品

長野縣に於ける鄉土研究の旺んなるは全國に其の比を見ざる所で、既に各郡から出版された學術の專門的著述が甚だ多いが本書も下水内教育會が鄉土研究の一事業として郡内の地質調査を計畫し、理學士君塚康治郎氏を委囑したものである。

野業一ケ月餘、研究室の仕事一年餘の間になされた仕事で北部は日石の大村技師の調査を參照し、南部は本間理學士の

信濃中部の調査を參照し丁度其の結合點附近の地質調査の結果が此の中に盛られてあるので我國の第三紀以來の地質學研究に非常に有益な資料を加へたものである。

本文七十四頁第一篇地形論、第二篇地質、第三篇雜項に分れ、圖版二九葉、內地層斷面圖一、地形のスケッチ及び寫眞十一葉、地質に關する寫眞七葉、化石寫眞四葉、岩石顯微鏡寫眞七葉、何れもコロタイプの明瞭な原圖版である。卷末に附したる十萬分一地質圖は本書の結論で、地質凡例十六の美しい多色刷地質で、圖中五萬分一詳圖及び斷面圖も含まれてゐる。

研究の結果として特に面白いのは信越國境の頁岩を最下層としそれより上層の砂岩、礫岩等の層が概して南東に向つて傾斜することゝ、千曲川に沿ふて共心の弧狀斷層が認められたこと等である。本書は印刷部數僅少にして既に水內教育會にも殘部なきやの噂である。(F・H)

○增訂海外交通史話　文學博士辻善之助著　東京小石川竹早町三二　內外書籍株式會社發行　定價六圓八十錢

本書は辻博士が大正六年六月に出版されたのを、其後の研究によつて新加十三篇の增訂をまちて、今度新に出たものである。菊版八一五頁の大册子である。上代の日支交通、遣唐使、勃海との交通、日宋交通、元明交通、倭寇等の史話をのべて朱印船に及び、秀吉の外國との交渉から蒲生氏鄉の羅馬遣使、德川家康の外交を論じ、末吉船、南洋の日本人町。江戸時代に於ける支那文化の影響。西洋文明と開國といつた三千年の外交史を一わたり略叙されてゐる。コロタイプ圖版九十六、いづれも珍らしい古文書、古繪圖、地圖の類であつて流石は史料編纂の大家の著述であることを首肯せしめる。筆者の特にうれしく感じたことは倭寇以後朱印船時代の日本人の南洋發展の跡が明瞭に述べられてあることであつて、安南ツーランの華嚴洞中にある日本人の寄附名簿、もしくはフエフオにある來遠橋や、江州日牟禮八幡の安南渡航の繪馬などの顯彰されたことである。本書載する所の古文書中には黑田侯爵家珍藏の漢委奴國王の金印なるものがある。天明四年九州志吹島に出土したといふので、有名であるが、王印としてはあまりに小さく、其書體も亦當時の多くの金石文字に比してやゝ拙いやうであるから、この金印については誰がこれを作つたかといふことを、今後に於て立證されねばならぬと思ふ。勿論上代から我國と大陸との交通は頻繁であつて、唐代のものにすると、支那の產と殆ど同樣なものが奈良の都に於て同時に出來てゐた位であるから、それ以前漢代のものも我國に多數出土して差支へはない、我等は本書によつて我等の祖先と大陸との交渉のいかに濃かであつたかを學びうればその目的は達しる。本書が世の多くの學徒に愛讀されることを信じ、この書の增訂を慶喜する。(藤田)

○京都府地形圖　八萬分一掛圖　大阪佐藤鄉土研究所作

京都府市の學校用掛圖である、鄉土研究を奬勵してゐる今

目、かうした掛圖は時代の要求であらう。本圖幅は鮮明な色層で地形をあらはし交通や學校に注意を拂つた外に、京都府の地質圖や、京都市街圖、京都府氣象圖などが附加してある著者は蓑きに近畿の地形掛圖を作くつて成功した人である。本圖も亦その需要が多いであらうことを信じる。(F)

○地理教材研究第十四輯　目黒書店發行

定價一圓四十錢

本輯には濱松師範の佐々木清治氏の市場町の研究と湊町の研究が光つてゐる。氏はさきの宿場町の研究に劣らぬ努力を本篇に向つてなされた。予は其の熱心な研究的態度を讃美する。猶本輯には氏の論文の外に、和歌山近傍の海岸砂丘及牧の原隆起三角洲の二篇が目立つ。第一輯以後の總目次がのつた。予は目黒書店がよくもこゝ迄この輯をつゞけてきたといふことに對しても敬意を表示したい。(藤田)

○地人論　エリゼ・ルクリュ著　春秋社出版　石川三四郎譯

定價二圓五十錢

本書は近代の碩學 Elisée Reclus の L'Homme et la terre の第一册の前半即第一編人祖論を譯したものであつて、譯者は佛國に留學し七年間ルクリュの家に寄宿して親しくルクリュに學んだとの事で、餘程久しい以前に本書の最初の方は譯されてゐたのであつた。譯者は原著地人論六卷を順次に譯出したいといふ希望であつて、こゝにこの偉大な人文地理書の部分を世に問はれたのである。予は石川氏を全然知らぬものであるが、今この譯書のいかにも流暢に文學的に書かれたのを讀んで、一讀卷を措く能はず、二讀三讀した事を告白したい。近頃の人文地理に關する著述の中で、本書ほど愉快に暗示に、將又教訓に富んだ名文を見たことがない。本書は人類の起源、地的環境論。勞働論。晩熟の民族。家族、階級、部落、歴史の分割とリヅム。の六章と、著者の小傳を載す。地圖も豐富であり、世界の各地に亙つて環境と人文との交渉を明確に論斷してあるのが實に本書の眞髓である、予は本書が廣く世に賣れて二卷以後の人文歴史も亦續々として世に出でんことを望む。蓋し原著者沒後廿五年を經過した今日、その世に出る餘りに遲かつたことを嘆ずるは蓋し者一人のみならんやであらう。最後に菊版三百三十四頁、印刷鮮明手頃の讀本であることをのべて紹介の辭とする。(藤田)

○人文地理學提要　佐々木彦一郎著　古今書院

定價三圓五十錢

本書は東大地理教室の俊才佐々木彦一郎氏が第一高等學校で講義された筆記を底本にして新たに研究された部分を加へた目醒むるばかりの美本であつて菊版三九二頁索引付、挿圖も立派なのが多い、章を分つこと七、第一章は人文地理學史の概説であり、第二章は人類の地理的分布、第三章は地理的環境への適應、第四章は聚落地理、第五章は交通地理、第六章は民族の政治的活動、第七章は世界の經濟地理であつて書名題して提要といふが如く廣汎な問題を短かくとりまとめて

あるのが手際である、通讀した内で目新らしく感じられた所は聚落地理である。著者は必しもこの部分に主力を注がれたわけではないであらうとは考へるが、しかしコロタイプ二十有餘がいづれも本章に關係してゐるところを見ると、聚落の研究を以て本書を特質づけんと試みられた事は慥かであると信ずる。ジュラやアルプスの溪谷の山村や鏈村や袋原の都會や河と都會との關係などを、一目瞭然たらしむる外國の寫眞をみせる丈けでも本書出版の意義はあつたと思ふ、日本の村落を取扱ふに當つて地名の解釋を參考し、その發達の史的研究に溯らんとする著書の態度は誠に結構なことである。我等は本書の著者によつてこれらの外國の聚落のみでなく、日本の聚落についても越中の散村連簪村落の少しばかりの實例を外にして更らに詳細な說明を聞く日の速かならんことを祈らざるを得ない、これは港市や都市についても同樣に希望される點であつて、しかもこの希望は單に筆者の望のみではないであらうと考へる。（藤山）

雜報

○小川博士還曆祝賀會

小川博士還曆祝賀會は豫告の如く、五月二十八日午後、京都帝國大學本館大講堂に於て賑々しくしかも非重に行はれた。

當日會するもの凡そ三百名、本館講堂の中央部を金屏風にかこひて式場に供し、正面に建畠大夢氏勞作の小川博士銅製レリーフ一面を据ゑた。これは壽像として祝賀會から、小川博士に贈呈したものである。

式は午後五時半大幸理學博士の司會の下に始められ、中村教授開會の辭にかねて、博士の功績と學風を發揚し、石橋教授會務の報告を終り松原博士から記念品贈呈ののち、新城總長の祝辭、文學部、理學部兩部長の祝辭、門下總代としての寺田貞治氏（文）、上治寅次郎氏（理）の祝辭があつて、やがて諸員の感喜の中に、小川博士の謝辭があり、六時半より別室に於て賀筵をひらいた。筵に列するもの凡二百、濱田、松山兩教授の司會で、めでたく盛餐を供し、デザートに入つてからは、狩野、内藤、足立の三名譽教授のスピーチがあり、狩野老教授は博士壯年の頃からの顏なじみで、當時は紫髮漆黑の美男子であつて今日の如く兀てはゐなかつたことを證明して會衆を笑はせ、内藤博士は支那で博士に近づきになつたとのべ、足立教授は還曆―退職―名譽教授、三者實は一つのことであつて、實は淋しいものだと一座にしんみりとした感を與へ、やがて中目覺氏は立つて小川博士の朝鮮及維納に於ける武勳のことを披露し、田中子爵、石川成章氏なども共に昔がたりに花をさかせば、朝日新聞社上野副社長は、同新聞社を代表して博士に負ふ所大なりしことを賞讃し猶行末永くといふ意味をのべた岩井京都大每支局長は博士によく叱られたことを追懷して博士の健康を祝し、小川琢治日本地圖帖が人